世界100人の物語全集

私はこんな人になりたい

集英社版 日本子どもを守る会 編

《12》平和をもとめる物語

デュナン　クーベルタン　トルストイ　内村鑑三
ロラン　ネルー　ラッセル　千羽鶴

世界100人の物語全集

私はこんな人になりたい

日本子どもを守る会・編

集英社

《12》平和をもとめる物語

- アブラハム・ダービー
- アンデルセン
- ●アンリ・デュナン
- 瓜生岩子
- エジソン
- エンクルマ
- 大庭源之丞
- 大原幽学
- エンクルマ
- 大庭源之丞
- 大原幽学
- 岡倉天心
- 小川正子
- 尾崎行雄
- 柿右衛門
- ガガーリン
- 勝　海舟
- 葛飾北斎
- ガリレイ
- 河上　肇
- ガンジー
- 北里柴三郎
- 木原　均
- キュリー夫人
- 金原明善
- ●クーベルタン
- 屈　　原
- 古賀忠道
- コッホ
- ゴッホ
- コロンブス
- 坂本竜馬
- シートン
- シ　ーボルト
- ジ　ンナー
- 白　ーン・アダムズ
- 神　ーマン
- シュバイツァー
- ジョセフィン・ベーカー
- 白瀬　矗
- 神八三郎
- スコット
- ストー夫人
- 禅　　海
- 曽田嘉伊智
- ゾ　　ラ
- 孫　　文
- 高野長英
- 高村光太郎
- 滝廉太郎
- タゴール
- 田中正造
- 玉川庄右衛門
- 玉川清右衛門
- ツオルコフスキー
- 津田梅子
- ディズニー
- 豊田佐吉
- ●トルストイ
- ナイチンゲール
- 中西悟堂
- 並河成資
- ニェープス
- 二宮金次郎
- ●ネール
- 野口英世
- 野口幽香
- ハーゲンベック
- ●バートランド・ラッセル
- 橋本五郎右衛門
- 平賀源内
- 平塚らいてう
- ファーブル
- フォード
- 福沢諭吉
- ベートーベン
- ペープルース
- ペスタロッチ
- ホセ・リサール
- 槙有恒
- 牧野富太郎
- 松木荘左衛門
- 宮沢賢治
- モーツアルト
- 本木昌造
- ユーゴー
- ライト兄弟
- リビングストン
- 良　　寛
- リンカーン
- ロダン
- ロバート・オーエン
- ●ロマン・ロラン
- ワシントン
- 渡辺崋山

世界100人の物語全集

私はこんな人になりたい

会との申合わせにより検印を省略します

NDC 280
集英社・昭和39年
P260 22cm

第12巻 平和をもとめる物語

昭和三十九年四月十日 印刷
昭和三十九年四月十八日 発行

編 日本子どもを守る会
発行者 陶山巌
印刷者 大橋貞雄
印刷所 共同印刷株式会社
製本所 松井製本所
本文用紙 大昭和製紙株式会社特漉

発行所
株式会社 集英社
東京都千代田区神田一ッ橋二ー三
電話大代表(262)三二〇一 振替東京一五六五三

定価三九〇円

©1964 日本子どもを守る会

落丁・乱丁はおとりかえします。 printed in Japan

はじめのことば

わたくしたち人間がもとめてやまないものは平和です。わたくしたちは人が人をころす戦争はぜったいに反対です。もう戦争をしてはならない時がきたのです。しかし口で平和をとなえることはやさしいが、これを実行するにはいろいろな困難と勇気がいります。

わたくしたちは、この本によってみずから困難と戦い、平和のためにつくした人びとのことを学びたいと思います。そして未来に生きるわたくしたちは、どうしたらいいかということを考えてみましょう。

もくじ

世界100人の物語全集

《12》平和をもとめる物語

国境をこえて

「赤十字」の生みの親
アンリ・デュナン

幼年時代……11
青年時代のゆめ……17
ストー夫人に会う……27
アルジェリアの天地……32
ソルフェリーノ……40
赤十字の旗はなびく……48
この物語を読む前に……9
デュナンの小伝……10

……酒井朝彦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ひるがえるオリンピック旗

近代オリンピックを創設したクーベルタン

スポーツの万能選手……55
オリンピアの遺跡を発掘……57
古代オリンピック……58
鉄は熱いうちにきたえよ……61
復活第一回大会……64
近代オリンピックの開催地……69
日本の初参加……69
ひるがえるオリンピック旗……73
この物語を読む前に……53
クーベルタンの小伝……54
……奈街三郎

戦争と平和

愛の作家レフ・トルストイとふたりの日本人

ヤースナヤ・パリヤーナ……79
ありのきょうだい……79
セバストポリの戦い……81
戦争と平和……82
イワンのばか……85
……西郷竹彦

トルストイと蘇峰……90
日露戦争とトルストイ……97
トルストイと蘆花……103
トルストイの墓……106
この物語を読む前に……77
トルストイの小伝……78

国賊か愛国者か

平和の戦士、内村鑑三

……小出正吾

日本の夜明け……109
英語の学校……112
北海道にて……118
わかい開拓者……123
アメリカへ……126
光を見つける……130
平和の戦い……133
ほんとうの愛国者……136
この物語を読む前に……107

内村鑑三の小伝……108

平和と自由を守って

人道の戦士ロマン・ロラン

広がる戦火……143
戦いをこえて……145
ピアノの音……149
平和と自由のために……151
平和精神をつぐもの……155
この物語を読む前に……141
ロランの小伝……142

塚原亮一

独立への長い道

新しいインドの指導者ネルー

かくしだてをしないこと……161
苦しみの中の良心……162
金持ちで最高の階級……164
ホワイト・オンリー……170

山本和夫

インドに自由を……171
悲しいアフリカの話……174
イギリスに負けるな……175
イギリスに留学……180
クラスの人気者……181
無口な大学生……185
祖国へ帰る……193
わきあがるうたがいの雲……196
ガンジーとあく手……199
石をあたえられた……202
ガンジーの片うで……207
道はみずから開ける……212
第三勢力の道……216
この物語を読む前に……159
ネルーの小伝……160

水爆戦争に勝利はない

心からの平和主義者ラッセル

デモの先頭を……219
思索の朝……221
めずらしい客……223
おいたち……226
孤独な少年……229
新しい出発……231
信念の人……234
この物語を読む前に……217
ラッセルの小伝……218

……大蔵宏之

千羽鶴

「原爆の子の像」を建てた子どもたち

平和公園……239
白血病……240
校長先生、お願いします……245
平和をきずく児童生徒の会……249
だが、おとなたちの中には……251
これはぼくらの祈りです……253

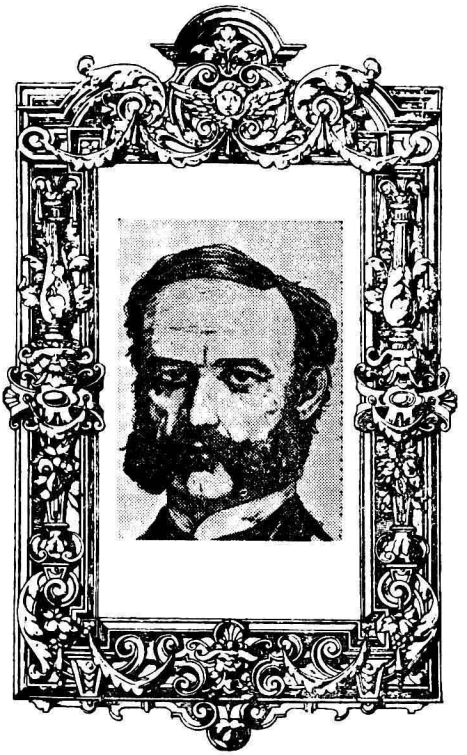
……山口勇子

この物語を読む前に……237
原爆の子の像のできるまで……238
はじめのことば……1
写真口絵
あとがき……255
作家紹介……260

文中の☆は、本文の重要なところを写真図版でしめしている。

装丁　AD＝沢田重隆・D＝鈴木康行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



国境をこえて

「赤十字」の生みの親アンリ・デュナン

赤十字を作った人が、アンリ・デュナンであることは、知らない人がないくらい有名です。

そのデュナンが、どうして赤十字を作るようになったか、その精神はどこから生まれてきたか、またその生涯を博愛と平和にささげるために、いろいろの困難と戦わなければならなかったこと。しかも、その困難やはくがいにあっても、初心をまげずにつくしたしんけんさに、わたくしたちは心をうたれます。

口で平和をいうのはやさしいことですが、それを、じっさいに作り出したデュナンについて学びたいと思います。

作・酒井朝彦　　さしえ・武部本一郎

デュナンの小伝

ジャン・アンリ・デュナンは、一八二八年スイスのジュネーブに生まれた。父は市の参議員で、母は信心深い人で、家庭は、慈善に心をもちいていて、やしきをまずしい人びとや、みなしごに解放していた。

こんな家庭で育ったデュナンは、早くから、不幸な人びとの問題に頭をなやまし、学生時代から貧民救済団に加わって、不幸な人やまずしい人びとの世話をした。

一八五九年六月、北イタリアのソルフェリーノの丘でのイタリア統一戦争のむごたらしいようすを見て、すぐ、近所の人をかり集めて、傷病兵を教会や学校へ収容し、敵みかたのくべつなく看護した。

三年後に、かれは、「ソルフェリーノの思い出」という百ページたらずの本を書き、傷病兵をすくう組織を世界によびかけた。たちまち、スイス、ロシア、オランダ、イギリスなどから激励と共鳴の手紙がとどけられた。

終戦五年後の一八六四年八月、十八か国の間で、ジュネーブ条約（赤十字条約）が成立し、デュナンの努力が実を結んだ。

また、かれは、万国キリスト教青年同盟（Y・M・C・A）のもとを作ったり、奴隷解放につくしたり、その他慈善事業など人類につくした功績がみとめられ、一九〇一年第一回ノーベル平和賞をおくられた。一九一〇年、八十二才でなくなった。

参考図書　デュナン著「ソルフェリーノの思い出」（スイス）
福田和彦著「アンリ・デュナンの生涯」（白水社）
露木陽子著「赤十字の父デュナン」（偕成社）

写真提供　日本赤十字社

幼少時代

みなさんは、白地に赤い十字をえがいた旗が、病院や街頭にひるがえっているのを、よく見かけることでしょう。

それは、いうまでもなく、赤十字の旗である。この旗は、博愛と平和とをあらわすものであって、戦場でもこの旗をかかげている所には、こうげきを加えることはできない。

赤十字というものは、それほど人類にとって権威のある、たいせつなものであるが、さてみなさんは、そういう赤十字は、いったいどのようにして作られたのか、知っているだろうか。

五月八日を、赤十字デーとして、世界百二か国の赤十字社が、この日を中心に、赤十字の目ざすところの、人類の幸福と、世界の平和への精神を、広めることにつとめている。

そして、この五月八日こそ、赤十字を初めてこしらえることにつくした、☆ジャン・アンリ・デュナンの生まれた日である。

アンリ・デュナンは、今から百三十年前、一八二八年に☆スイスの美しい湖の都である☆ジュネーブに生まれた。

この都は、青いひとみといわれるレマン湖の南にあって、ローヌ川の清らかな流れが、町の中を流れている。その川口から、わずかに東によったベルデーヌ街——そこにデュナンの生家があった。

家はジュネーブでも、名の知られている旧家で、父のジャン・ジャック・デュナンは、ジュネーブ共和国の国会代議員を、長い間つとめていた。また、ジュネーブ孤児収容所という、あわれなみなし子たちの世話をする所で、慈恵局長という役についていた。それから母はアンヌ・アントワネットといって、スイスの有名な物理学者で、工業家でもあるダニエル・コラドンの妹であった。

母のアンヌは、たいへん美しい婦人で、キリスト教の信仰のあつい人だった。そして心がやさしく、子どもの養育ということには、とくべつ熱心で、孤児院の世話を引き受けていたこともあった。

デュナンはおさないころ、母につれられては、よくセント・ジェルベの慈善院にいる気のどくな病人や、よるべのない老人や、まずしい人びとをみまったり、なぐさめに行ったりしたことがあった。

こんなとき、デュナンは母が病院の戸口にあらわれると、病人たちの顔は、たちまち喜びにあふれて、かがやくのを、おさな心にも、はっきりと気づくのであった。

「ほら、花をあげるよ。」

そういって、デュナンはかかえてきた花たばを、病む人たちにおくった。

「まあ、まあ。おぼっちゃまが、お花をくださるんですか。」

「これは、まあ、なんといういいにおいのする、ユリの花でしょう。」

「ほう。目がさめるような、赤いチューリップだこと。」

病人たちは、目になみだをうかべて、デュナンのさし出す花を、一本ずつ受け取るのだった。

母のアンヌは、また病人たちにお菓子をくばったり、ときには聖書の一節を読んで聞かせたり、また静かな声で、賛美歌を歌って、なぐさめてやるのだった。

帰りの道みち、母はおさないデュナンの手をにぎりしめながら、

「ねえ、アンリ。きょうもいいことをしましたのね。あの人たちは、どんなに喜んでたか知れないのよ。」

「うん、ほんとだ。なみだをこぼして、お花のにおい、かいでたよ。」

「そうね。ただあれだけのことが、気のどくな人たちには、イエスさまのおめぐみほどに、ありがたいのでしょう。」

「じゃあ、ぼく、天使だったのね。」

ジュネーブ　スイスにある美しい湖の都市であり，ここに国際赤十字社の本部がある。

「ほ、ほっ。ええ、天使ね。あんたはその心を、いつまでも持ってて、大きくなってもわすれないで、世の中の人のために、良いことをしてあげてくださいね。」

「うん。そうする、きっと。」

母と子は、こんな話にむねをおどらせながら、石だたみのあるレマン湖の、岸べの町通りの道を、ふみしめるのだった。

また、デュナンが六才のころのこと——。

ある寒い日、デュナンは母といっしょに、セント・ジエルベ教会へ日曜の礼拝に行った帰りに、森の中の小道を、馬車でかけぬけていた。

すると、静かな森に、何かきみょうな音がひびくのであった。だんだん近づくと、のこぎりの音、おのの音、そしてドーンとたおれる大きな木の地ひびき——それを聞きつけたといっしょに、目の前に、鉄のくさりを足に引いて、働いている人びとのすがたがあらわれてきた。

それを見たデュナンは、いきなり声をかけた。

「じいや。馬車をとめてくれ。」

ところが、母はそれをさえぎった。
「いいえ、とめないで・・・。」
「だって、あの人たち、かわいそうだもの。ぼく、おりてなぐさめてやりたい。」
「いけません、いけません。あの人たちは、悪いことをした人なんだから。あんたなんか、近よれない人よ。」
「でも、あんなくさりで足をしばられて、お役人みたいな人からしかられて、むちで打たれているんですもの。」
デュナンは、馬車のまどから顔をつき出して、目の前の光景におののきながら、さけぶのだった。
しかし馬車は、とまらずに森をかけぬけてしまった。
寒風にさらされ、ぼろぼろのシャツ一まいというすがたで、むちを受けながら、みじめな労働にしたがっていた人びとは、おさないデュナンには理解もできない、囚人たちだったのだ。
——ああ、どうしてあの人たちは、あんなむごい目に会わなければならないのだろう。——たとえどんな悪いことをしたからといって、あのように足に鉄のくさりをしばりつけられて、むちで打たれて・・・。
——どうして人間が人間を、あんなにいじめねばならないのだろう。もっと、やさしく、いたわってやれないものだろうか。
おさないデュナンは、むねの中で、こんなことを思い続けた。人間に対する疑問というか、いきどおりというか、そういうものが、はげしくむねを、ゆすぶるのだった。そしておかあさんは、どうしてあの光景を、じぶんに見せまいとしたのだろう。
しかしデュナンの目は、ちゃんと見て、しっかりと心にきざみつけた。
「まあ。あんたはないてるの。」
母はしっかりと、デュナンをだきかかえていた。
「だって、あの人たち、気のどくなんだもの。」
「そうね・・・。」
母のアンヌとて、思いは同じだった。どんなに罪をおかしたものとはいえ、それは人間である。罪は罪——しかし、罪をこらすために、人間にあのような苦痛をあたえ、しいたげてよいものか。あやまちは人間にはありがちなものである。それをこうかいし改めさすためには、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com